特254
160

0057249000

0057249-000

特２５４－１６０

創設から現今まで陸軍名物男

綿貫六助・著

森田書房

昭和１２

AJF

156

特254
160

陸軍歩兵大尉
柳貫六助著

陸軍名物男

創設から現今まで

十錢

森田書房版

特254
160

陸軍歩兵大尉
綿貫六助著

創設から
現今まで

陸軍名物男

森田書房版

昭和十二年十二月廿六日

序論

陸軍名物男――皆擧つて護國の神である。嚴乎として時間空間に超越してゐる――從つて本記述も、時の年代順や空間と出身國別などにとらはれない。

要は、彼等の横顔を朗かに表現し、快味のうちに一縷、素朴な武士魂、國士の俤を偲んで頂ければ欣快の頂上である。

目次

一、赫々たるロマンスの野津將軍……（一）
二、有情義太夫仙波將軍……（四）
三、佐久間將軍のカモーとマンザイ……（八）
四、歩哨になつた梅澤混成旅團長……（九）
五、釦（ぼたん）不要の田村治與造閣下……（一二）
六、コツ〳〵屋の寺内正毅陸相……（一三）
七、妊娠會議と佐官椅子の吉岡將軍……（一三）
八、軍刀旗手だつた荒木將軍……（一七）

九、妙義岩上に鯱立ちの等々力將軍……（一八）
一〇、名は體を現はす（その一）……（二〇）
一一、名は體を現はす（その二）……（二一）
一二、田中義一の大映（クローズアップ）……（二三）
イ、田中式散布射撃……（二三）
ロ、施設の大恩人……（二四）
ハ、將帥の雅量……（二五）
ニ、禿（はげ）間（ま）違（ちが）ひ……（二六）
一三、日蓮將軍林太一郎……（二九）
一四、大村兵部大輔……（三一）
一五、鼻毛にギツクリ本郷大將……（三五）
一六、森林太郎の缺點……（三八）

一七、緣切箱と參謀肩章……（三九）
一八、軍神橘大隊長……（四一）
一九、田中館大隊長と「君ケ代」……（四三）
二〇、露西亞を揉（もみ）潰（つぶ）した明石將軍……（四五）
二一、蚤と共に歸國の明石將軍……（五〇）
二二、水の効用……（五一）
二三、肉體と名物男……（五二）
二四、開戰とシヤンペン……（五二）
二五、希典（ケン）大菩薩……（五三）

陸軍名物男

綿貫六助

一、赫々たるロマンスの野津將軍

日清戰爭では、仙波太郎の策を容れ、疾風迅雷、三方から平壤を包圍し猛烈な攻擊を加へて、第一軍司令官山縣有朋が到着しないうちに叩き落してしまつたところの勇猛と機略とを兼備した新進將軍であつたし、

日露征役には、三軍首を鳩めていよ〳〵かの遼陽に迫り、大手をひろげて必死の攻擊、屍山壘々、鮮血は山野を染め盡し、さてなか〳〵陷落しさうもない、ばかりか西比利亞經由、氣鋭の新着軍團擧つて逆襲する氣配がみえ出した。

有繋の兒玉參謀長も、栗鼠のやうな眼をキョロ〳〵させて、神楽といふ奴を練つたが、どうにもならん、いよ〳〵萬策こゝにつきて、退路を朝鮮にとり、背進（退却）の軍命令を起案したる時こそあれ、滿洲軍の中堅なる第四軍司令官野津將軍、毅然として（然し、あの好男子のお曹子面で）――『首山堡を奪取せば遼陽全戰の死命制すべし！』――と喝破して、多大の死傷をものともせず、前進又前進、突擊又突喊、とう〳〵剛頑な敵を擊滅して立派に奏功したのであつた。

尤、筆者、昨今、念波通信で、閻魔帳を調査してもらつた處、美男子野津將軍の胸は、和製の鋼鐵で出來上つてゐると返信があつたが、三途の河の一つ手前で、生前ロマンスの審査が行なはれ、それも無事にパスして、もう天上に列座を占めておらるゝとの事。

そのロマンスはざつとかうである。

話は日清戰爭以前にさかのぼる。ある夏、上州國境の尾瀨沼邊に久しく小屋がけで住んでゐる由（山男）のあたりをうろ〳〵してゐる紳士がある。多分野州日光からの山越であらう。

沼を峠一重隔てた由が小屋、前は千仗の崖、溪擊瀑溪として萬綠に響き、汗を拭ふ紳士と山男の由が向合つた。早い話が、由は體重二十三貫、三貫目の大木刀をビュー〳〵振廻し水を潛ればアメ鱒を引ッ摑み、山野を駈れば兎や雉子を捕へ吹矢、弓、鐵砲はお手のもの――自然人の無邪氣さに屬懇惚れ込んだ紳士、二人連れの山獵の面白さに數泊するうち、かれは野津だと名乗つたから、今度は、由の方で呆然とお平のやうな口をあいて、使徒行者が神佛に對するやうに渴仰戀慕してしまつた。

『野津由』といふ名を賜はつて、命名式をあげ酒酣な深更、十五になる由の娘が下の小川村から歸つてきて、ふるへる手でお酌をするその顏がまた觀音樣然と氣高く然も美しく可愛らしい。

――

毎夏の遊山では飽足らず、たうとう由夫婦を東京の邸に引取つたが、何しろ虎を犬小屋に入れた恰好で、運動不足、望岳病、たう〳〵由は面やつれて時には涙など滾してるので、『どうした？』玄關番の由に閣下心配顏、

『うちィ歸りたくなりました。』

『ふむ、あゝあ、やはり野におけ女郎花か――』閣下時じく嘆息遊ばされ、大入道のおみなへしに、到底はまりツこはないけれど、やるせなき記念に、我官軍時代の軍服一揃、金品を思存分あたへて、そこは私製の鋼鐵で造つた胸、清兵も露軍も一喝すべき將軍も、ほろり有情の一

雫、後朝の別れを斷行したのである。

三途の河の審査場では、汚穢なロマンスと思ひの外極めて溫情數奇將軍にはおもしろき逸事なりとて、さてこそパスして天上界の神位に祭られたとは可敬可尊。

二、有情義太夫仙波將軍

〜一の谷へと、押し立て押おし立あてッ——テテテンテン、テンツ、ンツン——

野津將軍が平壤攻擊で困つてる時、「御所櫻堀河夜討辨慶上使」の有情な追憶の勇ましい一鎖で活を入れて、攻城を成功させたのは前述仙波將軍の藝術味である。

何しろあの嚴密な士官學校時代に、稽古本は衣匣に忍ばせ、寢室便所洗濯所、時間空間能ふ限りのベストを盡した。否、さう爲なければ仙波候補生は生きてゆかれなかつたのである。

卒業前、地方へ測圖演習に出掛け、唸つたり踊つたりしてゐるので、たうとう、大切な「アリダートニベラトリス」を失くした。『見付けて來い、さわりばかり唸つてゐるからそんな紛失をするのだ——』高價な測量機械故區隊長が叱ると、出掛けたが、夜の點呼（九時）をすぎても戻つてこない。區隊長心配になつて、今度は小使や喇叭士を連れて、機械より大切な仙波候補生を探しに出掛けた。

とある物かげに聲がする、區隊長胸をなでおろして、そッと近づいて窺ふと、

〜一町いつてもまだ見えぬ、二町行つてもまだ見えぬ——唄のなかなるアリダート、そなたは十分待つたとて、千年萬年、待つたとて、何の便りが、ァ、ァ、ァ、ァ、ま、あろぞいのう

——

木の根節を抱いて泫然有頂天、千松の屍を抱擁えた忠義の政岡になつて、

〜三千世界に、物持つた奴の心は皆一つ、——『仙波候補生ッ！』區隊長が呼びかけると、『やッ八潮、我子の仇きッ！』根節が懷劍に早變り、襲掛るのを、

『まて、解つた。私がお前を案じる心も解つたかッ？』一喝に及ぶと、陶醉境から覺めて『はい、解りました。』といふ工合で、紛失した機械を殺された愛兒の千松に見立てゝの愁嘆場は有繋に仙波將軍の玉子時代だけある。

義太夫等は高價藝であるから仙波はブルヂョア育ちかと思ふと違ふ——愛媛の久米郡福音寺村の庄屋に生れたが、父の代に微祿し、六七ッの頃から甘酒賣、雜魚賣、ひゞあかぎれで汚な

いあはれな少年で、ある歳暮に金貸が請求に來た時には、父は病床で泣口說くが、頑固債鬼き
かばこそ、臺所の薄暗い隅には、仙波少年が隣家と同じ音で餅を搗出した。
『その餅を持てゆく。』
『あい、おぢさんに迷惑をかけたのを早く返さうと思つて搗いてるンだい。』
『此奴にや敵はん、その餅はいらぬ、搗けたらお前食べな。』さすがの債鬼も尾を卷き牙をおさめて狐鼠〳〵と逃去つた。
人情忠孝を義太夫の節調で叩きこみ、それこそ、將校任官後も「無性たかり」で有名だつたが、洋行して歸朝るとハイカラに豹變、髪は櫛の齒美しく軍服の襟もぐツと高くし一躍して高襟將軍の英名を聽かした。だが、大和魂には寸分も變りなく、戰術書なども義太夫節で讀むのに變りはないありさま。
義ーさてこそ、第十師團參謀長當時、將校連の頭目となり、市の家屋附加稅の苛重を鳴らし、ストライキ畫策、仍て已むなくお上では、第八師團參謀長に轉任を命じたが肯かぬので一時停職となつたのは有名な話。
その義も情も美しや顯はれたのは、名古屋師團長當時の事——腰が低く、誰にでも同樣丁重

であるし、一兵卒に對しても本當に將軍の殼を蟬脫して眞の愛情で接する、夜間巡視、演習歸途などには、それが美しい閃光を放つて衆兵を欣ばしたものだ。
一例をあげると、第三師團長の時に特別檢閱をうけたことがある。これは、特別に勅命によつて行はれるもので、大抵な將軍は睾丸が上つたり下つたり容易ならぬ難關なので、檢閱使自身だつて必死だからコチカタマる。』檢閱中に一時間の大休憩とは何事ですかッ?』兵營から練馬場に至る途中の思はぬ休止に檢閱使が靑ざめて突ッかゝつた。
『はあ、この炎熱では、適當な休息を與へて元氣を恢復せしめ、充分に演練受驗の目的を達したう思ひますから——必要もないのに兵衆を虐めるばかりが能ではないでせう。』
ハイカラ髭で微古笑をしてゐる仙波將軍の眼前には、蒼膸めた檢閱使などはない、
〝兎角戰といふものは、腹が空つてはゆかぬもの、そこらに茶屋があるならば——
「モジ兵法」か何かゞ躍つてゐたと謂ふ。
父兄はじめ演習見物、檢閱見學、その他の野次馬まで、有情將軍の態度に欣び、赤毛布の父兄など感涙に咽んだとは、ある古將軍の述懷である。

三、佐久間將軍の河盃と漫才

強くさへなれば何をどうしても名物になり有名になれる。

さて、家付娘で若い義太夫語りを御ひいきの仙臺切つての佐久間第二師團長閣下。

何かの檢閲で指揮官振りガツチリと、只今命令を下すところである。

『――敵は、鬼怒川河盃に進出せしものゝ如し――』

『きぬ川かもウとはなんだらう、はゝあ、きぬ川の鴨をうつのか。』あとでの下馬評だ。『さうだ、きぬ川のかも打ちだ進め〳〵、』

大に勇進大勝利を博したが、あとできくと、あれは、鬼怒川河盃であつたので、そんならあんなに猛烈に勝たンでもよかつたとある。

その演習結了して愈々大饗宴となると、閣下酒杯をあげ先づ師團の萬歳を祝して、

『第二師團漫才ーィ!!!』

部下將士悉皆これに和し、

『漫才、まんざーい、まんざーいッ!』

で、ぐッと干杯すると、とてもよく酒がまわつた。あとで一將校、

『萬歳よりも、閣下の漫才の方が、酒のまわりかぐッといゝぜ。』

四、歩哨になつた梅澤混成旅團長

仙波ほど凝つてはゐなかつたが、梅澤道治少將閣下なか〳〵の多藝で、對陣や休戰中にはよく脚本などを作つて上演させたりしたものだ。

あの日露戰爭中、右翼方面に活動して、本溪湖に敵が大軍を提げ必勝を期し、今度こそ日本軍を右側面から横なぐり、散々に蹴散す必死の亂闘急襲を、たうとう防支してクロパトキンの野望を畫餅に歸せしめた戰功は有名だが、同將軍の超將軍振りも一の逸話を殘しておもしろい。

時は秋色たけなわ、丘や高地が錯綜した本溪湖邊の風光も肅條、大自然の美が靜寂の裡に躍る。

微醉後の將軍、いつもの習慣で、ふらりと司令部を出で、丸腰の、刺繍のある支那靴を突ツ

かけ、右翼陣地の眺望の佳いあたりをぶらりぶらりと山頂づたひにゆく。

あかい滿洲平野の落日の雄大莊嚴美麗さ、將軍詩情むら〳〵ッと湧き陶然とする折こそあれ、望遠鏡に映つたのは、鮮血色の夕陽を背に負つて、雲霞の如く渦卷き寄せくる敵兵であつた。

『敵の軍が來るよ、歩哨、報告にゆけ、至急（＋＋＋）だぞッ。』

『いえ、私は任務上、こゝを離れることはできません。』歩哨頭として服從しない。

分時を爭ふ突嗟の場合、閣下頷き、

『ヨシ、そんなら、わしがお前に代り、お前の任務に服して歩哨になる——るすは大丈夫ぢや、安心して駈けていつてこいッ。』

『はい、賴みます、至急（＋＋＋）で報告してきまーすッ！』閣下が歩哨に立つたのを見て眞しぐらに疾駈出した歩哨の後姿を、手こそ合せないが將軍は拜んだ。

この數十倍の敵の急襲に對して、一歩哨の報告がキソとなつて、梅澤全旅團は數晝夜の血戰惡戰苦鬪の後、完全に敵を驅逐したのである。

歩哨の任を負ふた多藝多能の梅澤少將も正に自由自在な心境であつた。

五、釦不要の田村（治與造）閣下

陸軍で川上操六以來の働きものとチヤホヤされた田村治與造閣下、山梨縣の山奥から這出して山縣有朋に信任極めてあつく、日淸役には第一軍の參謀副長として、當該司令官山縣將軍に從ひ、參謀長小川又次と意見衝突、どうも山梨縣で山には緣あれど小川には緣薄しとの御審判で、戰爭の實行にはあまりこれも緣の薄い山縣閣下、激戰の幕があきさうになると例の御發病、依つて、田村閣下は御腰巾着を拜命して內地へ凱旋を命ぜられた。

何しろ病人附きでの歸國故に、看護婦の如きお役目、幾分の鬱憤も勿論だが、宇品港に上陸すると卒然として姿を消した。

悠々として歸つたところをみると、ズボンの釦がないので、どうしたと訊くと、風通の爲にあけてきたといふ、その豪放ぶりを山縣將軍一番熱愛したといふ。その時、田村閣下は京都の花やかなところへおもむき、悠々自適といふ奴をきめこんで鬱憤をはらしたとか。山縣にほめられた味は忘られず、その後田村將軍は、暑氣の頃には大臣大將の席上などでもおかまひなく、

胸釦は勿論、股釦まで外してゐたといふ豪放ぶりであつたが、日露大役を前にして惜いことに釦は不要と外したまゝで世を去られた。

六、コツ〳〵屋の寺内陸相

前陸相の御尊父で、あの尻上り眉、ビリケン頭、お手々は不自由で左手で敬禮あそばしてゐたやうだ。

ざツくばらん的に申せば――器局甚だ大ならずと雖、精勵無比、綿密周到、日露戰役の經理を好況に導いたのはその御功績の一。

時は、日露の風雲急――河野廣中の上奏文事件――議會解散――といつた多難繁忙の時期、その多忙錯綜は想像にあまりあり――時は突然、臺灣守備隊の工兵大尉星野某から電報飛來、開いてみれば、

『カクカラハジショクスベキヤ』とある。

寺内閣下嚇怒烈火の如く、副官野津一輔を呼び、自ら、『陛下の御信任なり辭職せず。』と起稿し、特別至急電報の打電を命じた。副官最初おとな氣なシ――と思ひしが、命には抗し難く打電すべく引下つて用意し、さて、も一度その電文をよむと、

『カクカヨハジショクスベキヤ――おッ、なんだ、これや、ラとヨのまちがひだ。』

早速、工兵大尉星野が進級のおそいのに業をにやして、とツぴにも大臣宛に進級强請の電報を打つた事を申上げて、閣下御草案の。『陛下の御信任なり辭職せず』は打たずじまひとなつた。

コツ〳〵屋の面目、こゝにも躍如たるものがあるではないか。

七、妊娠會議と佐官椅子の吉岡將軍

吉岡友愛將軍といつても御存知ない人もあらうが、福岡市の公園に行つて見たまへ、堂々たる銅豫が立つてゐる。宜こそ、軍神吉岡將軍といへば、日露奉天戰李官堡で、鬼神も哭する壯烈な戰死をなさつたお方だ。その時は名古屋の歩兵第三十三聯隊長であつた。

無所畏――これが軍神吉岡將軍のモットーであつた。あらゆる彼終生の繪卷物はこのモット

ーから繰りひろげられる。

鐘旭大臣のやうな髭黒々と微笑ふとやはり鐘旭大臣が莞こついた恰好で、怖わくも懐かしくもおもはせる無口な人柄であつた。

陸軍士官學校の中隊長當時、陸大出身の彼は、〇〇宮殿下（當時中尉の御階級）のお附武官を兼任、何くれと御指導申上げてゐた。

士官學校の會議で、「佐官椅子」といへば、佐官以上が集合しての會議なのである。恰度、吉岡中隊長が週番なので、同官が指圖して佐官椅子を本部の樓上に備へることゝなつた。

いよ〳〵會議は開かれた。ところが、佐官でない〇〇宮殿下勿論御臨場になつたが、吉岡將軍、命令通りに、佐官の數だけしか椅子を用意してゐない。

そも〳〵儀式公式校長よりも上席に位してゐなさる殿下のおかげになるところがないのだから校長始め面喰つてしまつた。

殿下は鷹揚な恰好でお立ちになつてゐなさるから、將校全部がまごついた。

『――吉岡大尉、殿下のお椅子を――』

學校副官がこッそり囁く。

『大急ぎで殿下のお椅子を――ッ』本郷生徒隊長が迫らぬながらも少々高聲に注意すると、

『はア、「佐官椅子」といふ御命令故、佐官椅子を備へました、尉官の椅子はない筈です。』

『また、そんな事を――困るぢゃないか。』

副官が聲を殺して眉根に皺をよせると、殿下莞爾と微笑あらせられ、

『吉岡大尉殿、殿下は愼ましく笑顔を吉岡將軍に向けつゝ、

『結構であります――立つてゐた方が涼しい、椅子は要りませぬ。』

その剛頑をやわらかに愛撫なさる殿下の和やかなお言葉に、當の吉岡始め並居る將校頭をさげてほッとしたものである。これ卽ち、階級を守る事至嚴な吉岡將軍の逸話である。

かういふ恪好の吉岡將軍だから天保錢（陸大出身）ながら進級もおそく、三十七歳の鍾旭大臣まだ大尉でゐたのである。

いや、それよりも、まだ〳〵おくれてゐる一事件が存在した――美しい令夫人に子がないのである、結婚して八九年まだ赤ちやんが授からないのである。

鯉、蝮、鷄卵はもとより、腦脂の睾丸、野猿の蒸燒き、ビタミンABやホルモン劑、大學病院での精液檢査――鐘旭將軍いくら焦燥つても赤ちやんができない。

皮肉なもので、一方部下の下士（四十前後から二十歳迄）のうちには三人も四人も子供のあるのがある。

吉岡將軍部下の下士（體操劍術教官）を愛すること甚だしく、毎月一晩づつ全員を招待して終夜の痛飲、下士だからとて子供が中學に入學するといへば、初産さへなし得ぬ吉岡夫妻よりも古參であり、上級でありそのミチにかけては上官である。

さてこそ、例會は誰いふとなく「姙娠會議」と決り、酒酣の頃には、眼尻をたらして承る吉岡將軍を包圍して、歴戰家が思ひ〳〵の苦戰奮闘談、ショワケ委細——臨床、略圖詳細を以て講演に及べば、吉岡將軍有頂天になつて大歡喜あそばされ、

『うむ、やはり、君たちの講話の方が、腦脳髄の睾丸よりも優良さうな——尤、皆、實戰修羅場の結果ぢやからのう、あは、、、、』

その實驗あらたかにて、次年は佐官に進級、玉のやうな女の子が産まれた。

御轉任の時には下士皆泣いた。

——留ニ疎影一而謝ニ從來之厚誼一——寫眞の裏に一々揮毫して、その鍾馗然たる英姿を部下に贈り、さて陸軍省、第三軍副官、歩兵第三十三聯隊長で一躍して軍神の靈位に永劫の座を占められたのであつた。

彼の生涯には「佐官椅子」の剛頑も點綴されたが、その本質はその名の如く友愛の情に溢れてゐた。人間創造の「姙娠會議」も餘情永久に薫じわたる。

その令嬢の旦那は工學士と承つたが——

八、軍刀旗手だつた荒木將軍

陸軍大將男爵荒木貞夫閣下——と申せば誰知らぬものなき名物男に相違ないが、ちゃあ、何か奇拔な處があるかといはれても、何もそんな、別に變つた處はない。

たゞ彼には、耿々一片護國の赤誠、水火もおかし難き大和男兒の氣魄、稀代なる明晰な頭腦それを象徴したものが、彼の少尉時代から一ツあつた。それは平生から軍刀をつッてゐた事である。

彼は明治三十三年の頃、近衛歩兵第一聯隊の聯隊旗手であつた。一體旗手なンてのは、參謀か副官の玉子みたイなもので、事務官だ——聯隊長や同副官の事務の助手なのだ——それが普

通の指揮刀はつらずに軍刀をさげてるのだから滿更變つてゐない事もないが、赤誠と叡智と氣魄とを裏付けた行動故に、誰も何とも批評手はなかつた。

あの廣々とした近衞旅團の營庭に、東海から朝陽が燦々と昇るころ、整列の全聯隊——着劍捧銃捧刀——秋の薄芒の蕭條の面前へ、軍刀を佩した美青年荒木少尉が旗護兵に衞られて、歷戰にふちかぐりの紫のみを殘した軍旗を捧持して出現したときの莊嚴さ、この名物は崇高な佳き意味の變りものであつた。

九、絶壁上に鯱立ちの等々力少尉

上州妙義山の絶頂の斷岩上に「轟岩」といふのがある。何十仞の絶壁又絶壁の累々たるその頂上で、器械體操の倒立を演つて、さて、その岩に「轟岩」と刻したのださうな、その御當人が當時高崎歩兵第十五聯隊附なる少尉等々力森藏その人である。

だから冒險大膽は彼の生命、器械體操などもその熱心さ加減といつたら、何の事はない、忍術使ひの苦行に等しい。

その等々力で等々力はかなりに出世したが、彼が、士官學校の區隊長時代に、生徒に體操をやらせる恰好をスケッチしてみよう。元來士校の體操は副隊長は教官、技術下士が直接に手を取つて生徒に教へるので、まづ將校は大抵腰に手を突ッ張つて助手を監督してゐればよいのだが、等々力のは變つてゐる——竹箒の長短種々なのを取揃へてわきにおき、木馬などのわきに仁王立ちになつて『さあ來いッ！』と、どら聲を吹出す。

まづ跳臺などの不得手な生徒は、その權幕でヒヤリと冷汗でドッキリと來る。

颯ッと風の如く華やかに跳越えると、

『よおうしッ。』と會心の巨聲を報酬し、臆病を出して跳損ね、跳臺の前に尻ッビリ腰でタジ〳〵としやがみでもしようものなら、

『こらッ！』これに眼玉と件の竹箒が見舞はれる。も一度やりなほしだ。

なかには、たゞかれまいとして、而しまた足の調子が狂つて、跳臺と仁王の竹箒まで到着せぬに、離れ馬の如く横へ切れるのがあると、『こいつッ！』と、今度は長柄の箒を大上段で、食傷の羅漢顏に變相して追ひかける。『ヒーッッ』と、令嬢に追ひつめられて仔猫の恰好で生籬の隅にしやがんでしまふ。その頭の上でビュウ〳〵箒を振廻し、

『度胸が据つたかッ。』

『はーイ。』

『ようしッ。』襟首摑んでズル〳〵木馬の下にもつてきて、威勢をつけてやる。

最初、雪掻棒や、舂棒などを用ゐたが、生徒の尻を打つて腰をぬかさせては一大事と、さてこそ竹箒に改正したのださうな。

一〇、名は體を現はす（その一）

近衛の師團長ガツシリと男振りだツてそう惡くはない長谷川好道閣下――何しろその、道を好むこと抜群にて、英名をとゞろかされたのはいふまでもなく、就中、清元、二上り新内などは十八番で、今あの聲でやられたら市丸孃だツて跣足で逃出すだらう。

兼好『のたまのさかづきそこなきが如し』とかだが、こいつはまた、好色、好藝、好酒、好奇――限りもなく、玉の杯底がありすぎて、時々底抜け騒ぎを演じ――幹部演習の夜、專習員は首と昇進の天下分け目――必死になつて戰術作業に首をひねり、――圖面と首ツ引きのまんなかへ、あの圖ウ體で酒氣紛々の夜襲に及ぶ。

なンどはまだ〳〵閣下極めて猫を冠むり大人氣豐かな方で、時には、青樓からウマを引き來り、そして牛太郎君を同輩に紹介する――その被紹介者中でも、沖原光孚君などはその隨一であるとの噂。何でも沖原君が支拂はなかつたら、好道閣下、ウマと牛太郎のために女郎屋へ逆戻り、アンドン部屋へ入れられて牛々な目にあふ處だツたといへば、ちョいと可愛らしい名物男ではある。

一一、名は體をあらはす（その二）

世間ではビスマーク將軍といふが、あれより少々水氣乏しく骨張つてゐるし、あの、眼玉とまぶたのかけ離れた陰影に、なんとも謂ふに言はれぬ古色がある。顏色全體の澁紙といはうか、古帷緒色といはふか、あの線の佶屈剛峨は割引きしてもだ。

こんな廻遠い形容よりも、その體をそのまゝ表はす名をいつた方が遙に近い――秋山好古――好古といふ概念や潛在意識が、あれまでにあの顏を古くみせるとは月並ながら一驚に價す

る。高潔と無邪氣（花袋に酷似）さは、好道閣下圖體からほとばしる美音と好一對の複比例をなしてゐたさうな。

たゞ一つ、好道と好古に萬里隔絶なところがある、といふのは、秋山好古には、飲酒三樣式といふ大發明がある。——何しろあの滿洲には蠅がワン〳〵と密集してゐたから、幾ら司令部の酒にだッて必ず一匹や二匹は入つてゐる、それが酒杯に入込んだときの飲酒三樣式——これこそ好古の大發明——正に好道の二上り以上だとは、さる通ウの話である。卽ち——一は、爪先ではぢき出す、二は、まづ飲み舌であしらひつゝ酒は吸つて蠅は吐出す、三は、蠅諸共にぐッと鵜呑みに嚥下する。但、その三法何れを用ゆべきかは、酒故とその時機如何によるとは好古自身の御敎訓。

『フウ、好色好酒は共通だが、好古の奴、無粹な奴ぢやねえ。』と二上りで讃められた極樂から好道閣下の通信があつた。

一二、田中義一の大映

增師（團）問題の張本人になつたのも、それに關し、澁澤榮一お爺さんに、增師讃成を演說させた籠蓋振りの策略も、田中自身に拔群の才能と、錯綜を處理する敏腕と、創設的な智略が備ればこそだ。

されば、この男には、眞劍と滑稽と、流暢ぶりが至る處にゆたかで、將軍といふよりも寧ろ政治家といつた氣肌が感じられる。

イ、田中式散布射擊

いつか將校團の宴席で、でぶ少佐を馬にして謙信を氣取り、宴席の大廣間で馬にはねられデングル返つた「神武以來の候補生」といふのがあつたが、これは更に一枚凝つて、士官學校の卒業試驗がすむと外出して大醉し、前へ二步後へ三步、とにかく校門は這込んだものゝ、器械體操場で大の字なりに寢込んだ名物——嚴重な學校では大騷ぎ、卒業式をひかへて營倉入り、卒業式は倉內で悠々とすました人物——こういふ工合故、ソノミチにも苦勞をなし、その惡戲の結果——一の女に執着するな——撤布射擊で立身せよ——これが田中の實驗哲學（エンピリカルフイロソフイー）であつた。

ロ、施設の大恩人

日本軍隊の日露戰後は、殊に軍隊家庭といふ事に覺醒して、全國子弟の軍事教育、忠孝道の教養に力をつくしたのであるが、その源泉をたどれば、田中義一をあげざるを得ない。全國青年團創設なども同閣下與つて力ある位置である。

その始めは、どうも兵士の外出は弊害が多いから隊内に娯樂機關を設けて、同時に品性をも向上し、普通學の教育もしてやりたいといふのが田中の考案で、さあ、それから、各中隊には娯樂室が設けられ、舞臺が作られ、狂言、浪花節、義太夫、講談、落語はさらなり、今でいへば映畫といふところの幻燈、西洋音樂を取入れてオルガン——その外に、中隊毎に將校に擔當させて習字算術作文を教へ、娯樂室はお正月の書き初めの空氣で習字清書が貼並べられ、いつでも和氣靄々として國民教育に盡した力は多大なものである。

殊に、農事講話には相當な技師を呼んで講演をさせ、各中隊兵舎の前後に花壇などを設けて農技を奬勵したのである。

この施設の恩人、某聯隊長の時、聯隊の後の空地に射擊場を作る事を考へたが、費用は出ず、

兵力でやれ——と決心して、いよ〳〵毎日若干時間宛各中隊から使役兵をとつて工事を始め、完成したが、一時は田中も大童であつた。

ビヤ樽の春を擔ぐ姿哉——その通りで、ビヤ樽の恰好の田中隊長殿、工作兵に交つて春をお擔ぎになつたので、今のヒツトラーやムツソリニなんどの如く音を立てゝ騒ぐのでなく、衷心から軍國の爲にヤルのだから尊いものであつた。

ハ、將帥の大量と友情

田中の麾下に編入された乘馬隊が、ある森林に宿營した處が、馬が樹木の皮をみな食べてしまつた。

さあ大變、地方から四五百圓の損害賠償を迫つてきた。もと〳〵その乘馬隊長の過失ではあり、乘馬隊長此度こそ馘と、思案投首打萎れて、田中の前に出で、おづ〳〵報告すると、

「ウム、好し、心配するな、」すぐに主計を呼び現ナマを投出させて賠償し、お小言一ついはなかつた。術方面からみればコツであるが、田中の將帥としての大量はうなづかぬわけには參らぬ。大尉は感涙に咽んだのである。

臺灣總督でなくなつた明石將軍の遺族に對する田中の友情も、そのぐるわでは大に好評になつたものである。

二、禿間違ひ

狸の田中――などゝいはれつゝも、大事些末眼から鼻へ突ン抜ける男だが、ある時一ツの失態を演じた。

田中が急いで行くその先へ一人の禿頭が、軍帽片手にノコ〳〵とテクツてゆく。

『おい、橋本ツ！』田中が聲をかけても返事もしない。

（怪しからン奴だ何をスマシてゐやがるッ。）御念に及んで、今度は高聲に、

『おーい、禿勝ーウ！』と呼叫んだ、ハテ、田中とは同輩の、頭惱くらべ智慧比べの好敵手、近衞師團參謀長の橋本勝次郎だ。あとからみれば朝陽に、禿頭がウラ〳〵と輝いてゐる如何にも禿勝なのに今朝に限つて返事をしないとは怪しからん。尤、田中は昨夜青樓で徹夜して神經も少々尖つてゐるからむツとした。（けしからん奴だな――昨夜の功名譚をきかせてやるのに――）ぷり〳〵して追ひかけて、焦り氣味に後から肩をぶンなぐつておいて、活でも入れてやるつもりで、

『オイ、コラ、何をボンヤリしてゐるンだ、朝ツから、おい禿勝ウ、昨夜の功名譚をきかせてやるぞ、――』からあびせ掛けるうちに、ニュッと後に振りむいたのは、禿勝どころか、當時、日本軍隊内でも錚々たる工兵監上原勇作閣下だ。但し、ヤカン頭の磨きあげは、なる程、二日醉ひの田中が間違へる位の、禿勝とおツつかツつ。

『なんだ、ばかにはしやいでるのう？』

例の握り飯でブン擲るといつた辛辣な一瞥をあびせられた田中、ギツクリと立ちすくんでしまつた。

『はツ、まちがひましたツ――』新兵のやうに發音すると、狸をかなぐりすてゝ不動の姿勢にコチンとかたまつてしまつた。

『なんだ、なにをまちがへたツて？』

『はツ、その閣下のお頭が、非常に橋本大佐に似てゐますので、ついまちがひまして――』

『あゝあツ、あの橋本禿參謀か、――然し、君はソコツだの――』

『はイ、申譯ありません、失禮申上まして、』

『いや、わしのは、橋本參謀のよりか、五六本多い筈ぢゃが――綿密屋の君にも似合はんのウ――そんな間違をするとは――?』涼しいのに冷汗をたら〳〵額に浮べてゐる田中を苦笑ひで睨めつけ、

『そして、その、何やら、功名譚といふたのう――?』

『閣下、おゆるし下さい、もう、あやまりました。』泣微笑ひで田中が尻ごみしつゝ頭をかくと、

『フム、夜間戰鬪か、そのヤカン戰鬪なら、やはり、こツちが上ぢヤ上原だ――あはゝゝゝ』

『どうも、まちがひまして――』

『まだ弱いの、浦潮の六つ位落しても、わしはまだ平氣ぢやよ。』

『ご尤で――まちがひまして――』田中は命から〳〵早々に逃歸つたとの事。

田中程のものが、なぜそんなにおそれ入つたかといふと、上原將軍は、その言の通り、浦潮の六つ位は一夜に悠々と陷落せしめるところの勢力を具備し且つまた韜略能力、軍政手腕共に田中の畏敬するところであつたからであるといふ。

一三、日蓮將軍林太一郎

ヌーッと落付拂つたところ――いかにも、有名な綽名の『牛歳の丑』に適はしすぎる――ものぐさで、長重で、一見鈍重にさへ觀える林將軍、でゐてなか〳〵用兵にかけては疾風迅雷、神速といふ域に達してゐるので、ちョいと齒のたゝないところがある。

實戰では、所謂、獨斷活用といふ奴が、ピシ〳〵と上官の肯綮にあたり、挺身行動など奏功神の如しといはれてゐるのはどんなわけかとウカゞッてみると、眞粹激烈なる日蓮信者とある。

なる程、用兵風の如く、「不識庵」とも綽名されてるのをみると、川中島が彼には幾つもあるらしい。

どうしてそんなに機敏巧妙にいくかといふと、彼には、日蓮大菩薩の靈感があつたらしい。その靈感に依り、右に、左に、前に、後に自由自在の用兵が臨機應變であるといふ手品の種本があがつた。

なる程、ノッポーのボンクラに見えてゐて、かの日蓮の前後二回蒙古の船を叩き破るくらゐ

な靈力が修育されてゐたから、日蓮の林太一郎と謂つても立正大師少しも澁面などしないのみか、四條金吾殿以上に可愛がつて、太一が露營の夢にもお姿をあらはし給ひ、深更に讀誦の砌には、天上から大菩薩のお聲があつて、天耳をお授けになり十方をきかしめられたのであるとぞいふなる。

だから、兵器、用兵などの世界新智識でも、用兵の實際技倆でも、圖上の兵棋や戰術でも、經理上などの頭腦でも、なんでもござれギツクリガツタリ引ッかゝりなどはしない。法華經の所謂、無障礙で、風の如く、エーテルの如く自在なのだ。

殊にも、あの氣魄は、平素瞻仰する立正大師の直々お授けになつたもので、わが生命をかけて『われ大日本の柱とならん。われ大日本の眼目とならん。われ大日本の大船とならん。』と叫ばれて、刀杖瓦石、流罪死罪をものともしずに行ぜられた俤と同一であつたとは尊しともたふとし。

熟〻惟ふに、さすがは、大日本帝國軍隊だ。法華經の父子、師弟、君臣の三大道を地の果て(全世界)にまで、廣宣流布せしめようと覺悟して、佐渡の流罪中に靈感によつて、その宣傳軍の旗印なる、所謂、大曼荼羅を顯現した日蓮上行如來瞻仰の名物男を出さうとは。

なる程、これで、あと約五十年で支那を片付け、そのあと五十年で殆ど全世界を片付けて、この神佛のお加護で全土を樂園にするといふ事が可能なのかも知れぬぞ——妙な方へ話が滑脫したが、おもへば光明るいことでうれしい。こゝに於て、これをみても、いざ、これからの軍人に、林將軍の如き人をもつともつと欲しいとおもふのは豈獨り筆者のみならんやである。

一四、大村兵部大輔

九段靖國神社境内に、陣羽織に双眼鏡といふ姿で、東京全市、否日本全國、否世界を睨睥してゐるのが大村兵部大輔で、これこそ我大日本陸海軍創設の名物男である。

長州の醫師孝益の長男、最初は父業をつぐ積りで、防府の蘭學醫梅田幽齋や漢學者廣瀨淡窓や大阪の蘭學者緒方洪庵や蘭醫奥山靜叔や、シイボルトなどについて苦慘な修學をしてゐるうち、どし〳〵と學業が進むにつれ、「醫士は人體を治するに止る、俺は國士となつて國定の疾病を政治せねばならぬ」——所までコギツケた男である。

美談や苦心譚はぬきにして、結局、その頃のバラクズのやうな各藩兵を調理して式兵一定、

横濱に佛式語學校、大阪に兵學寮、伏見に兵營、ッたのはまだいゝが、安政二年三十二歳で宇和島侯に仕へてゐた頃の、「軍艦の雛形を造り進水式をあげて九島に航し、その後幾つかの船艦を造り航海術研究に長崎に出向く」とあるこれらが海軍の始め、陸軍の創始で、只今では世界を押さうといふ——この狀態を、當の張本人たる軍部創始の名物男はドンナ面をして眺めてゐるか？

だが、兵學寮や軍艦で軍隊が建設されるものでなく、まづ人で、その人の整理、これが大變先決問題が、王政復古、それ故の彰義隊討伐だ、四境戰闘だ、函館だ——施術消毒、投藥、健康、それからが軍部活動の幕に入るので、村田亮庵先生たちとう大した國病治醫所謂國士になつてしまつたのだ。

やはり血か？　魂？　氏素性か、おそろしい——性を尋ぬれば藤原、諱は永敏、幼名惣太郎、稼盛りが藏六で、益次郎は慶應元年四十二歳の時藩命でかう改名したのだ。

どういふ了簡でかくも數多き名をつけたかは暫くおき、彼が名物男としての第一資格は名だの姿などを後世に殘す根性が薄かつた事であらう。それが證據に、彼は寫眞といふものを殘してゐない。

あの九段の銅像も實は後人の創作なので、まづこの邊——といふ所を古舊名士が造らせたもの、よく大村名物男を丸出しにしてゐる。

も一ッ、名物男としておもしろいのは、彼が、親に非常に孝行であつたこと、師恩を片時も忘れなかつたこと、更にあの終生の大活躍の大忠義——この大偉德を完備した點は、法華經を地で行つたもので更に尊い。

で、なんとしても、この名物は、右三德の中心をなす忠といふ、殊に、彼が遭難者、絶命に至るまでの念力を拜すれば、その忠魂を記すれば名物の內の最高名物なる事が解るといふもので、

ユーモア、突飛、滑稽、逸話など數限りもなく豐富なのだけれど——

兇刄の遭難が明治二年九月四日で四十六歳、同年十一月五日大阪で亡くなつたが、その間、彼の身內を駈けめぐるものは病瘡の苦痛でなくして、軍國建設の事ばかり、——不惜身命といふ法語があるが、彼の斷末當時はその境地からはズッと立越えて、身命を忘れ、身命に氣がつかずにゐたので、たゞあるものは、忠義一徹で——長州征伐、五稜廓壓倒、會津揉潰し、彰義隊燒拂ひ——あんなものは內輪揉めの兎追ひだ、眞の大戰は海外相手のこれからだ。——軍事

病院設立、鎭臺設置、鎭守府構設、兵制改革、兵學校、兵器製造工場――あゝ仕事が多いのに寢てはゐられぬといつて、狂ひ出しさうで看護のものも大變だつたといふ――東海の名物男が躍如としてゐる。

菊日和の麗らかな時、聖上から優渥なお見舞があつた。息を引取る數日前のこと、扶けられて起直り、天を拜してほろりとなり、

「あゝ忝ない、御勿體もない、何のお役にも立たぬに、あッ、」枕頭の船越男爵に、

「あの、低廉で輕便な四斤砲を澤山造つてくれ、あれに限る――大砲も進んだものだぜよ。」感激の涙にぬれてなどゐず、すぐに四斤砲へ渾身が向ふ。

その頃、自筆の意見書で皇軍創設に關するものには、朝廷の兵制永敏愚按、軍務所爲順序、皇國兵制一般に成る目途、等々に目次され、意見の卓越は勿論だが、死期を前にしてゐながら、確固とした麗筆蹟で、ちッとも亂れてゐないのは、頻死にも忠節の三昧境がうかゞはれて頭がさがる。

英國公使パークスを日本皆兵で叩ませ、西郷を兵制目逕で說諭し、隣座敷の絃歌を金錢が反逆して脫走する跫音と觀じ、詩經の一句（哀々父母、生レ我、劬勞）を佐藤一齋に揮毫しても

らひ朝夕膳具を供へ羽織袴で諄々禮言を申上る――など、こゝには上層な名物男の俤を略記し詳き事は他日にゆづる。

一五、鼻毛にギックリ本郷大將

溫厚の君子そのもの、丈長なビヤ樽に短かい足をくッつけた恰好、はえぬながらもやはり聖人の御顏ばせ、號令は細く徹るいゝ聲を注ぎ出した。

某隊の中隊長の時、各中隊競點射擊が施行され、一番の中隊にはその名譽と共に何かの御褒美が出ることゝなつた。

さあ各中隊は一生懸命、本郷中隊だッて必死であつた。

いよ〳〵あす射擊といふ日、本郷一策を案出し、各中隊全部の將校を靑樓におびき出した。射擊前日の大酒や不眠など禁物だが、人から誘はれて出ぬとあつては卑怯な形になるので、皆々ワンサと押掛けた。

酒醋の頃本郷の姿がみえぬので探すと、もうちやンとアイカタの部屋でスツポリ寢こんでゐ

る、皆横手を打ち、本郷の奴あすはゼロだと大欣で、どうせ拂つた金だ、早く飲むだけ飲んで、大急ぎで歸つて豫行演習でもしようとの肚で皆氣を緊張めてせッせと飲みあばれ、ぐた〳〵になつて歸ると夜があけた。

こなたは本郷中隊の將校連、程よく飲んで早く眠つたから、青樓の二階からハッキリしたアタマで悠々と射場に臨んだ。

徹夜で騷廻つたのと、ゆッくり寢たのでは比較にならぬ射擊點數で、本郷中隊は第一等になつた。その勝敗のネタを探ると、もとは女郎屋に囚へられたものと、囚へられぬものとの相違だと本郷將軍聖人の如きお人わるをおもらしになる——遊廓だとて見下げてはならぬ、我さへ正しく淨ければ最上の慰勞場で無上の準備場である、女の香で魂をうごかし、酒と不眠に囚はれては勝てッこないよ。

この聖人、晩年に中央部の人事に携さはり、東北の良將校を探出さんものと一巡に及んだことがある。まづその聯隊近くの溫泉に宿をとり、姐さんやお師匠さんなどを呼んで盛ンに盃を與へ、終には御携帶の强ウヰスキーを飲ませて、さま〳〵のお話をきく、將校の遊び振りなどもあらかたのみ込み、なる程評判の通り下大尉かよからうときめ、その翌日下中隊の舍內巡視

娼妓の懷中で射擊優勝の準備をする男だから、兵舍內を視て、どの程度の戰鬪能力を教育してるか位は判別するお眼識を具へてゐる。下中隊すッかりパスして、さて、下大尉と本郷閣下が相對する段取になつた。

下大尉會津藩士で粗野剛直、までは結構であつたが、ナポレオンが惚れつきさうな大きな鼻の穴、閣下の前に不動の姿勢をとつて、宙天に向けた鼻の穴、茶色のムジャ〳〵髭、その鼻孔から朝日に虹を吹き出し、その虹が、よれ絡んで生え出してゐる鼻毛を颯々とそよがせてゐる。それを拜んだ本郷閣下、もう厚い唇をまッ白にして、溫泉場に引揚げた、いや實は逃歸つたのだ。

あとで曰く『何ぼなんでも、あの鼻毛はひどいよ、髭だか鼻毛だか解りやせンぢゃないか。あれぢゃ都會へは出せんよ。何とかあれを刈込むかどうかしてもらはんことにや——中隊教育の方針も實施も東北で優秀だが——なにしろやんごとなき御邊りの勤務ぢゃからね——あれからどうも惡寒がしてならん。』

飲殘りのウヰスキイ瓶を鞄にいれ、本郷將軍下大尉の鼻毛におぞけをふるひ、消々として都へお引揚げになつた。

菓物の種大きらひ、毛虫大きらひ、といつたオボッチャン風なところもうかゞはれたが柔和、溫厚な名物にかはりはない。

一六、森林太郎の缺點

文學博士、醫學博士、學識、手腕、人格、上にもよく下にもよく、閥内によく閥外によく誠に申分なき名物男だとある。

いくらお髭のちりなど拂つても、この閣下に對してはトント利き目がない、どころか、反對にひどい目にあはされる。

もう片足は軍醫正になりかゝつでゐる某一等軍醫、森閣下の御檢査には必死だつた。衛生施設、患者の狀況、醫療機械の手入保存から看護階級の教育に至るまで、本日パスしたのは天の與へと欣び愼み、お見送りをすると、一旦門を出た閣下、ぐるッと後戻して、

「あッ、君、これを、」かなり部厚なもの、御褒美かと思つて『ハイ、』と、鼻聲で受取ると獨逸原書、

「本月一パイに、譯して小使にでももたせ——」

『はい、』とはいふものゝ、ギャフンとまゐッた軍醫殿、『やッぱり勉强する他ない。』

悲嘆の溜息であつたといふ。

ところが、某時代の軍人批評家曰く——森軍醫總監は正に偉人であり名物男である。然し彼には一つの病氣があり大欠點がある、何ぞや——小說を書くのが惡い、不評判はこれからきたる。

なる程、それは森の欠點であり、長所でもあるが、ひとつ、今の小說家は、この評言をバカにしないでよく味ひつくす必要があらう。

一七、緣切箱（士官背囊）と參謀肩章

日露征役當時、後備軍に少將と大佐の名物がゐた。前者は粟井原閣下、後者は可兒大佐であつた。

少將と大佐の一階級だが、實戰に入つて旅團長麾下の聯隊長は親と子ほど違ふ、それは職責

や任務がさうさせてしまふのだ。

處がこの旅。聯の長達は同期生で、もと、名古屋鎭臺に奉職してゐたとの事。

つまり可兒中尉は美男子で參謀であり、粟井原は稟生の澁團扇面で更に隊附の背囊士官なので、夢二が筆尖から浮出したやうな藝も佳なりな姐さんを張合つたが、澁團扇と緣切箱を擔ぎ出したのでは、美男の參謀肩章に敵ひよう筈がない、終に麗姐は、可兒にとられてしまつたとの事。——それだけなら何の變哲もないが、御兩人、休戰中、渾河邊の宿舍で共に一晩痛飲し、その激戰の懷古談になつたのだ。

一且は高官を勸めた秀才の廣大な邸內、可兒聯隊本部、古雅な彫刻の折戸の奧は軍旗室、その次が居室で、——粟井原閣下旅團副官を正座に、可兒大佐、各大隊長、副官、旗手、通譯官が榻にかけ食卓を圍んで宴酣。

聯隊長は美鬚を撫でて微笑を洩してゐる。旅團長の澁團扇面が廻るにつれて、いやにテラ〳〵光り出す。

『可兒、あの時は、俺も本當によわつたよ。』

鹿爪らしい四方山話が粟井原の懷古になつた。

『君に、あれをとられた時は、ほんとに、泣いたよ。幾晩も睡れなかッちヤよ。』

『閣下、何か競點射擊の標的でも射奪られたのですか?』

『いンニヤ——そのね、射場の的位なら　堂々たる男兒泣きもしないがね——』

『何でありますか?』皆眼まなこを寄せて探偵氣分になると、

『可兒の奴、こんなに、今でも面惡い程の美人で、その昔ワシの美形を奪略しおッたのぢヤ、生かしちヤおけン奴ぢヤヨ。』澁團扇にかいた蚤のやうな小粒な眼に涙が光出した。

『同年生れ、同期生、同じ中尉で同じ鎭臺に勤める因緣深い身でありながら、あのミチばかりは違ふとみえるね——』

思ひ〳〵の笑聲を、これもまた團扇のやうな掌で煽り消す恰好で、

『敵ふわけもないさ、可兒は中尉參謀、ワシは背囊背負つてバタ〳〵虫ぢヤ——緣切箱だもの——士官だといふので娘をくれて、演習見物で泥土塗れの背囊姿をみて、離緣した母も母だが、——「緣切箱に要はないわ」といつて、可兒に走つた女も女だッ!』

『閣下、まあ、さう、おこらンで下さい——すぎた昔ですから——』聯隊長はしなやかな手で鬚をなで〳〵お詫をいふ。

『諸君、閣下は、その失戀で、只今の將軍の地位を克得られたのぢゃ――失戀に限るよ。』

可兒大佐はかういふと、軍醫壽伯に傑作をもちださせて、粟井原少將の前に並べさせる。

『うむ、これマ、よい壽ぢゃのう。』半白が金ツバに殘つた禿頭をのどかにゆすぶツて、閣下の御機嫌がよう〳〵なほつた。

筆者はその末席に加はつた一人、この陣中のユーモアなノドカな名物をさゝげるのだ。

一八、軍神橘大隊長

橘大尉殿は、部下の兵士たちと一緒に掃除もすれば洗濯もする、銃の手入でも衣服のほころびでも兵士たちのなかにまじつて針を運び、下手な兵には自分で縫つてやりお手本を示し、おもしろい噺をして欣ばせる。

ほかの將校が精神訓話などするとき、夏の暑い頃でゞもあると、よく居睡りをする兵がある、するとその居眠りが前後左右に傳染して、あつちでもこつちでも、ボクリ〳〵と搗き始める。所が橘中隊長殿のお話のときに居睡りなどする兵士は一人もゐない。炎暑のなかのどんな烈しい演習でも、兵士は少しも氣を緩めず、眞劍に、おもしろがつて、そのお話に感激してゐる。

野外演習でも、行軍途中でも、舍内でも、殊に過激な運動後晝食などのおくれた時には、まづ兵士に食べさせ、他の將士に食べさせ、莞爾としてそれを見まわりながら、

「おなかがすいて、うまいか、うまからう、』などゝ、愛語、慰撫語をあみせて、たべもしない自分も本當にお美味さうにして、兵士の食事がすむ、さて、橘中隊長殿の食事となる、萬事この通りであつた。

慈母が乳兒を抱くやうに、神佛が衆生を見るやうに、さういふお心で部下にのぞまれた橘中佐はあの壯烈無比な御戰死をなさるその以前から神であつたのだ。

一九、田中館大隊長と「君ケ代」

『行くべえ、いぐべえ――それッ、確かりしろ、確かりしろ、ドシ〳〵いぐべえッ！』

醉ッ拂ひの囈言みたいだがさうでない――明治三十五年頃の秋季演習の夕暮がた、ぐた〳〵に疲れた兵士に、も一里强行軍るために、兵士の隊伍のわきから、かう勵まして煽りたてる田

中舘の恰好は、正に神武以來の變てこなものである。尤、陸大は軍刀、足は少々ビッコ、糸口の切れた奴凧のやうな歩きぶり、雛だらけな杓子面、おまけにいつもクン〳〵と鼻を鳴らすのは畜膿症のコジレたのであらう。

そのかはり、精神美もこの人ならでは——とおもはせるものが多い——友情に富み義理がたく、戰術などの能力は軍刀が保證してるし。兵士を可愛がること、前述の橘大隊長以上なのだ。美しく斷乎とした決心のもちぬしといへばこの人は正に名物の部に入つて差支ない。

日露戰爭——沙河戰——揚城塞の高地で、數倍の敵から不意うちを喰つたとき、死傷續出の裡に、鼻も最大速度でク、、、と鳴らし、『陛下にお別れ申上げて、これから、あの敵に突擊するッ！』かういつて大隊の喇叭手を雨裂（雨で壁が堀裂けた凹み）に集めて「君が代」を吹奏させたものであつた。

うべこそ、奉天戰の高臺嶺では、大隊全滅二三人生殘つた兵士と數百の敵中に突入し、眞に、斬り死にに戰死せられ、あとでみたら、總身瘡で埋められ、軍服も少しも形を存せずヅタ〳〵に裂け切られたとの事——誠に惜しき人だが、日露戰爭の大勝利は、かうした大決心から來てゐるのだ。軍神田中舘佳橘殿、あの雛くちャな顏を微笑させクン〳〵と會心の鼻を鳴らして欣んでるだらう——噴！

二〇、露國を揉潰した明石將軍

日露の大捷で——旅順の乃木將軍——日本海の東鄕提督を知らぬものはあるまいが、その裡面の力になつて、あの大勝利を獲得させた諜報課の明石將軍を知らぬ人は多いやうだ。將軍は當時大佐の働き盛り、露國革命社會黨、民權社會黨、自由黨、ブンド黨、アルメニヤ黨、ゲヲルギイ黨、レツトン黨、芬蘭憲法黨、同過劇反抗黨、波蘭國民黨、同社會黨、同進歩黨、小露西亞黨、白露西亞黨、ガボン黨、などを始め、その他の多くの黨と氣脈を通じ驅使し、シリヤクスの古猛虎やガボン僧正やプレパノフ、レニン、ゴルキイ、カストレン、メリコフ公だのデカノージイだの、ローラン夫人などまで籠蓋傾使して、思ふ存分に露國内を引ッ搔き廻し、ツ突き崩し、彼の東征の野望を畵餅に歸せしめたばかりでなく、露帝政崩壞の完全な初動をかもさしめた手腕は、東鄕乃木と並べて、日露戰捷の三大名物と謂ふことができる。ただ、前二者は正を以て顯はれ、後者は變通を以て表面に出ですに大功を奏してゐるのである。

明治三十七、八、九年にわたる變通功妙、錯綜混亂をこゝで述べてはゐられぬが、その行動の鳥瞰面を披けば――長尾中佐、宇都宮大佐、レニンなどゝ協力し、カストン、シリヤクス、デカノージイなどを顧使して、スキスやハンブルグ邊で爆彈、小銃、拳銃、彈藥其他の兵器を購入して夫々の黨員に配當し、實力で暴動を起す指導をしたり、ウラル邊の通信所を買收して僞電頻打、露國内の紛糾に熱湯を注ぎ、〇〇暗殺、〇〇爆破、鐵道破壞、露探變名住所錄奪略、不平黨聯合大會開催（巴里）、宮廷探索、造兵廠の同盟罷工、キエフ、オデツサ、モスコーの示威運動、黑海艦隊の暴動等々――で、最も明石將軍に生命を捧げて内通した露探スプリンゲルの妻ローランの虐殺、その他多くの部下の捕縛所刑など、悲壯な出來事も多いし、その身は終始死線に彷徨してゐるので、戰線に活動するものよりも更に陰慘な氣分が横溢してゐた。

そこで、露國内では、逐次動員に陷り、幾軍團かを、それに備へるために派遣軍隊に違算を來し、思ふ存分の戰爭ができず仕舞となつたのである。

尤も、さうなるのが御攝理であり、東からの光明が暗蒙を照破し草露を消滅するのは當然なことで、神國の御稜威は申すも畏多し。

さて、明石元二郎といふ名物男を少々紹介しておく順序になつた。

明石元二郎の家は福岡藩内でも藩公黑田家と姻戚關係のある名門である。藤原鎌足から十八代の家良が明石姓の始祖、それから十何代目かゞ元二郎になる。

父親――助九郎貞儀は千三百石の家柄を繼ぎ、長州騷動の頃勤王に參畫し、二十九歳で割腹したから、母親秀子は二十五歳で寡婦となり六歳と三歳（明石將軍）の遺兒を獨力で鞠育した名高い賢夫人だ。縫物、刺繍、保姆などをして子を育て、刺繍は殊に有名なもので今尚黑田家の家寶になつてゐるのもある。

鼻汁たらし、赤眼などの綽名で育つた明石であつた。母の苦勞も思ひやられた。

母は裁縫をしながら、篦でつゝきながら書物を敎へる、ある時近親のものがきたので、書物を敎へてくれと母が賴むと、明石はすぐ立つて例の篦をもつてきたとの事、それが四つ五つの頃の事である。

そのなかゝら幼年學校に入學して叩きあげた明石である。二十九歳の頃は大尉であつたが、方々からの緣談を拒絶してゐるうち、『母堂のおせわ申上げるのは妻なるべし』と、添田壽一博士に說明されて、妻帶し、何れの地に赴任しても妻は母堂に孝行をさせて同伴はしなかつた。

あの明治三十七年二月五日日露國交斷絶、同十日日本は宣戰の大詔を發し、明石が附いてゐ

た駐露公使館はストツクホルムに引揚げ、いよ〳〵その活動の幕が切つて落されたが、明石はそれまでに獨逸留學、佛國公使館附、露國公使館附等で恰度十年程ソノ爲に苦慘な研究を凝らしてゐたので一夕一朝の準備ぢゃない。

何しろ英獨佛露などの語をマスターして自由自在にできてゐながら、獨逸語ほかできぬといつたぼンやりした顏で皆き〻取つてしまひ、また他の場所では佛語ほか話せぬやうなふれこみで探索も自由無障礙だつた。

露國政府や宮廷內情の探索には、皇太后亮シエルバシエチにその同鄕の親友でギヨルギイ社會黨總務デカノージイに連絡を取らせて密々に何もかもかぎ出した。

露國內情の探偵には、公使館に出入する參謀大尉アミノフなどを買收した。爲替やその他の貴重書類の世話はアミノフの親友で富豪のリンドベルクを仲間にし、武器購入配當密輸送といつた錯綜せる難事も〇〇の官憲全權と手を結んでバラ〳〵進捗させる物凄さ。

そこで、前述の効果をも少し具體的に述べると——精巧な武器を得たバルチツク沿岸のレツトン民族は反亂を起し、所謂第廿軍團出動となつて東征輸送が鵝の喙。バクウ地方とスーシヤ地方ではガチヤ〳〵騷ぎで鮮血修羅場。モスコーの暴動で官憲も靑息吐息。フインランド反抗過激派が同總督の官衙を略奪。クーランの血祭騷ぎ。ポーランドの蜂の巢突毀し騷擾。キエフ、オデツサ、コーカサスは大亂脈の修羅場等々枚擧遑あらず——いくら、三百年不德漢行跡とは謂へあまりに慘憺たる覿面ものだ。そいつが銀幕の表面に映出されると——旅順は落ち、バルチツク艦隊は全滅、奉天からの總敗北と大映されてしまつたのだ。

レニンと明石はお互に愛敬し合つた仲よしだつた。明石の粗野とレニンの質素ぶりは共通した特長で、互に故國の爲にゆるしあつたものである。蛇の道はへびの道だツた。明石は皇軍戰勝のため、レニンは反人道な露帝政摧滅のため同ジミチを活歩した大國士だつた。

滿洲原野の露軍大敗北のあとも廣大なものであつたが、日本軍大捷の凱旋も大した盛んなものであつた。

噫——この盛況を、あの多くの戰病死者、探偵で命を捧げた人たちに見せたい——と思はぬものはなかつたらう——畏し　明治大帝陛下には、さうした人たちの靈魂も共に今日凱旋するといふ御製をなされた、噫——

二一、蚤と共に歸國の明石將軍

凱旋の歡迎山野をドヨモす時、明石のはあまりに變つてゐた歸國ぶりだ。色あせた背廣にもぢヤ〳〵鬚、鞄をさげてゐる。その薄汚ない孤影が、參謀本部に入ると多勢の參謀たちが歡迎の包圍攻擊をする——明石將軍の凱旋なのだ。

兒玉將軍の握手は殊に熱烈で、謝意と慰勞を深く强く籠めてゐた。

概況報告、經理上申、費用（殘額）返納等々がすんで、はつとすると、

『おッ、これは、』ウキツトの兒玉參謀、明石の鞄の底から、汚れたワイシャツを引ッぱり出した。

『あッ、閣下、それは、』明石は面喰つて、その手をおさえようとすると、

『いや、結構、フム、大變な虱ぢヤね——血筋、緣ぢヤ、血族ぢヤ、可愛いものぢヤねえ——』

縫目に列をなしてゐる虱群、兒玉の指の先で愛撫されると、皆光つた尻を突き立て〻萬歲でも叫んでゐるらしい。

『ほゝう、なるほど、やはり虱も若い人のは威勢がよいね——ワシのなど、白ざけてゐたよ』

さすがの明石、破顏微笑と微苦笑とを綯交ぜて、頭をバリ〳〵掻いてゐたとか。

二二、水の効用

朝鮮平定の頃、明石將軍は憲兵司令官か何かで、大活動をなし、ウマく丸めたが、ある時、押寄せた暴徒の波に、二階からポンプで水をハジキかけて擊退してしまつた。あとで曰く——糞水では糞度胸をすえて突ッ掛つてくる、彈丸では屁の跡片付が大變、熱湯では火傷でおだやかならず、清水でほこりを立て〻かけてやると、彼は恰度白衣のよごれるのを惧れる心理狀態で、あの通りに逃散らばッてしまつたのだ——は巧妙いものだ。

この男もまた、前述陸軍創始者大村益次郎のやうに大の親孝行で美談が多い。

臺灣總督で、母堂を殘して歿くなつた時、孝心切々たるものがあつた。いくら氣丈な明石將軍でも、終生の激務で體をつかひきつてしまつたのだ——そこに名物男の俤がある。

二三、肉體と名物男

往昔、大谷吉隆は全身不隨同然の癩病でも武勇將軍の名赫々。立花道雪は輦で鎭守祭の如くおみ輿で戰場に臨んでも、輿のふちをわれ竹か何かで叩く音で千軍を慴伏せしめた。

寺內正毅のテンボー、菅野の跛行、田中舘の跛行兼畜膿症、伊達正宗の獨眼、眇眼の山地元治、あげるときりがないから皮肉は止す。蓋し、男は靈魂次第、名物男は根性にある。牛馬とは事異いて、手足の一本や眼玉の一粉位あツてもなくなツても問題ぢャない。不具に偉人も多いわけだ。

二四、開戰とシヤンペン

チンカイ灣の射擊演習――あの數の多い戰鬪演習、それを分時も洩らさずに凝然として監督したのは東鄕將軍である。暗いから暗いまで、熱心に監督指導、その靈魂は、兵士の照準にも、發射にも、彈着觀測にも、何にもかにも滲透つてゆく――いつみても、艦隊司令長官閣下がチヤンと立つて双眼鏡をもつて監視しておられる。將士の心もまたちがふ――船艦や戰場へ女など引摺込んで陶醉してゐる毛唐將軍などゝは少々ちがふ。

バルチック全滅も、日本海戰大勝利も偶然事ぢャない。

時は二月六日午前一時、各艦指揮官旗艦に集合の命があつた。

各指揮官が將官室に入ると、東鄕將軍莊重に、あの小學生のやうな音吐で、

『聯合艦隊は、今より出動し、敵艦隊を擊滅する――從來の訓練は今日あるが爲である――前途の成功を祝し、大に祝盃を擧げる――』

一堂、寂光に覆れて聲なくシヤンペンの吹出す微音深刻を極めたといふ――おツと、これは海軍だ、閑話脫線おゆるしあれ。

二五、希典大菩薩隆

不落の旅順を陷落させておいて、歸國、天顏に咫尺するなり、罪の意義に燃えあがり『死を

賜へ。」の奏上は、菩薩でないとどこを押しても出ない音であらう。

戰死者の遺族などを見舞ふ乃木將軍は勿論如來であり大菩薩である。

伊香保溫泉へ浴衣掛けで出掛けて、梯子段下の三角部屋に入れられ、平氣で入湯してゐるなどは、正しく自由無礙の神であつた。

乃木閣下がお越しの筈と東京からきた偉いお方が亭主になじると、否さういふ、お方はゐないといふ、その三角部屋で中朝事實か何か讀んでゐる乃木將軍を發見した偉い人が、

『閣下、こゝに、おいでありましたか。』

三伏九拜あると、亭主は腰を拔かして、田舍爺と間違へての粗忽をわびたといふ。

安樂に納まつてゐた三角部屋から引出される乃木將軍、今度は、義齒を嚙出して眉根に八字をよせたと謂ふことだ。

某軍司令部衞兵長たりし次男の保典中尉が安藤主計に、閣下の鞍の乘り心地のよい奴を下さいと傳言させると、そんな贅澤は相成らん衞兵長には衞兵長の乘鞍が備付けられてある筈だと叱つて追返した。

ところで、勝典中尉の双眼鏡が五百餘圓で、同君の軍用行李内には三十圓の香水が容れてあつた。兜に名香をたく——種類だ。

東鄕乃木、英國戴冠式參列旁々世界一巡の際、殺されてもいゝからステツセルに會ひにゆきたい——詩人で情熱家の乃木がお鼻を鳴らすと、さすが東鄕は兄貴だけあつて、それヤ不可ん、君は殺られてもよからうが、君の身と陛下の大御聖旨を考へてみ給へ——で、たうとう危險なステツセル面會はできなかつた。何れも神佛でありながら、兄貴と舍弟といふ名詞がこの場合によくあてはまつた。

日蓮が鎌倉で辻說法をすると、法敎同志の男女の結婚がまるく出來するやうに、この人たちの至るところ、愚痴は賢良となり、惡者が選善の實をあげてゐる事がおびたゞしい。

乃木將軍の遺族巡禮で、子供を神にしてもらひつゝ自己我利で恨んでゐた痴呆がどれ程改悛したかしれない。

身邊に惡愚なものがゐても、それがドシ〳〵賢良になるから凄い。

希典大菩薩、平八郎如來、萬々歲!!!

——完——

昭和十二年二月五日印刷
昭和十二年二月八日發行

版權所有

陸軍名物男　定價十錢（送料二錢）

著者　綿貫六助
發行者　東京市麹町區有樂町二ノ二　森田益雄
印刷者　東京市芝區新橋三ノ二〇　荻四郎

發行所　全國配給所　東京市麹町區有樂町二ノ二　森田書房　電話銀座(57)二五二三番　振替東京一一九一一七番

月刊「話の王國」「オールユーモア」雜誌「旅行雜誌」「喫茶街」發行

北部配給所　新潟縣三條市田島三三四　森田書房北部支店
京阪神特約店　大阪市北區東梅田町六　大阪參文社

〔特約〕東京鐵道局公認（鐵道保養會・鐵道弘濟會・鐵道授產會）

各縣賣店・ホームスタンド・街頭新聞スタンド・有名書店にも有り

全國主要驛賣店有名書店ニテ發賣中

森田書房刊行書目

冊子即賣
普及會

鈴木日出輔著　支那に揚る對日宣戰の叫び　價一〇　送二
事業と會社研究所編　新東相場は今後も株界指標として役立つか　價一〇　送二
波篁人著　何うすれば株で儲るか　價一〇　送二
鈴木日出輔著　暴戾なる支那斷乎膺懲すべし　價一〇　送二
木戸勝著　今秋の穴馬はこれだ！　價二〇　送二
小松孝彰著　戰爭と宣傳の戰慄　價一〇　送二
鳥影盟著　怪教「ひとのみち」を裁く　價一〇　送二
ベースボール社編　早慶・早明戰の試合豫想　價一〇　送二
千田理示造著　何故成功したか、何故失敗したか　價一〇　送二
藤川京介著　邪教はいかに瞞したか　價一〇　送二
鈴木日出輔著　日本・人民戰線の正體　價一〇　送二
事業と會社研究所編　主要會社の增稅負擔額　早わかり　價一〇　送二
山田忍三著　何うすれば小賣商は繁榮するか　價一〇　送二
鈴木軍人著　馬場鍈一と寺內壽一　價一〇　送二
千田理示造著　處生訓・修養訓・讀書訓　價一〇　送二
横原運命學研講所編　競馬と相場は方位で勝てる　價一〇　送二
黑島大三著　謎の天理教を抉る　價一〇　送二
千田理示造編著　新常識讀本　價一〇　送二
事業と會社研究所編　增稅とこれからの景氣　價一〇　送二
櫻井大著　誰にも解る人相の見方　價一〇　送二
鈴木日出輔著　スペインの革命と全歐州の波瀾　價一〇　送二
中澤忠一補修　東京競馬の穴馬はこれだ　價二〇　送二
千田理示造編著　明治・大正・昭和大疑獄史　價一〇　送二
鈴木日出輔著　日獨協定と各國の動向　價二〇　送二
清川逸郎著　ヒットラーの新外交政策　價一〇　送二
事業と會社研究所編　株式投資で五年以內に千圓が一萬圓になるまで　價一〇　送二
鈴木日出輔著　若內豪古は何故戰爭を起したか　價一〇　送二
千田理示造著　人生訓話信長式・秀吉式・家康式　價一〇　送二
清川逸郎著　全支那・大動亂の全貌　壹一〇　送二
事業と會社研究所編　昭和十二年景氣と株界見透し　價一〇　送二
高橋清之著　無資本で出來る職業三十種　價一〇　送二
植野盛好著　スキー入門　價一〇　送二

◎既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は當書房又は最寄賣店へ。送金は振替又は郵便切手（二錢切手使用）のこと。

337
1011

全國主要驛賣店有名書店ニテ發賣中

森田書房刊行書目

冊子及普賣會即

アザブ（ラブ）伸著 新傑作万才 價一〇 送二

長谷川清著 エドワード八世とシンプソン夫人 價一〇 送二

高梁之助著 支那を攪亂する赤魔共產軍の正體 價一〇 送二

藤川京介著 張學良と蔣介石 價一〇 送二

及川孝二著 京都競馬の穴馬はこれだ 價一〇 送二

千日吾理示造 議會名物男 價一〇 送二

和久田正虎著 第七十議會の全貌 價一〇 送二

槇原運命學研講所編 昭和十二年運勢早わかり 價一〇 送二

永鳥眞雄著 手相と運命 價一〇 送二

槇原運命學研講所編 姓名の附け方で一生の盛運がわかる 價一〇 送二

鈴木日出輔著 發火點上の國際關係 價一〇 送二